

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

|                   |   |      |       |
|-------------------|---|------|-------|
| 1. 機関の代表者<br>(学長) | (大学名) 奈良女子大学                                | 機関番号 | 14602 |
|                   | (ふりがな<ローマ字>) (NOGUCHI SEISHI)<br>(氏名) 野口 誠之 |      |       |

2. 大学の将来構想

大学の将来構想

本学は、国内外の諸分野で活躍できる高度な専門能力を持つ女性人材の育成を基本理念に掲げ、教育研究を行ってきた。基礎学と応用学を両輪とし、大学院レベルではこれらを融合した学際的な教育研究を進めている。

とりわけ、本学が立地する「奈良」の地域特性を活かし、東アジアをフィールドとする教育研究を格段に進めるための拠点形成を目指している。その中の大きな柱の一つが本事業の「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」形成事業である。日本の古代国家が誕生した奈良盆地を中心に据え、古代都市に照準を合わせつつ、東アジア地域での都城の成立との関わりなどの国際的な視点から、考古学、歴史学のみならず、地理学・国語学・国文学・建築史学・修景学・美術史学・生活文化史学などの諸学を統合し、さらに奈良地域に集積された諸研究機関との連携を強化しながら日本古代の全体像に新たな観点から光を当て、革新的な研究教育拠点の形成を行おうとするものである。そのような拠点の中で、女子大学の特性を活かしながらアジアを中心とする国際学術研究を推進するとともに、国内外の優れた女性人材育成を目指す。

学長を中心としたマネジメント体制

本学では学長を中心としたマネジメント体制の下で、人事・予算・スペース管理などの全てを学長の統括下で行うこととしている。具体的には人事に関しては、「定年あるいは転出に伴う教職員の空ポストは全て学長預かりとして適正な人事配置を行うこと、任期制の拡大と原則公募制採用の実施、女性教員採用のためのポジティブアクションの採用、適正な研究員等の配置など教育研究の支援体制強化」などであり、予算面では「学長裁量経費による機動的な教育研究支援、プロジェクト経費枠による学内の競争的環境創出」など、またスペース管理については「総合研究棟の拡充と学長による一元的なスペース管理」などを行ってきた。本事業での実施に際しても、これら**学長のトップマネジメント体制をフルに活用し「人的配置、財政支援、スペース支援」を通じて拠点形成を強力に推し進める。**

さらに、本事業終了後も拠点活動の新たな展開をめざし、中長期的な観点から**奈良の地における古代日本に関する教育研究拠点の形成を学長の統括下で進める。**

3. 達成状況及び今後の展望

上記のような構想に基づき、本事業採択後に**学長主導により、大学の経費措置の下で次のような支援を行った。**

- ①**人的な支援措置**として、専任助教1名、特任教授4～5名、研究支援者1名を配置。
- ②学術研究推進とともに、院生の教育的側面を重視し、**国際シンポジウムの開催経費を継続的に支援。**
- ③本事業を行うため、**専用研究室**をコラボレーションセンター棟に措置。
- ④新たな組織として「**古代学学術研究センター**」を平成17年度に設立し、本事業とも連携しつつ**継続的な拠点形成の体制を整備。**

本拠点は上記の措置を含めた大学からの全面支援の下で、5年間にわたり、古代都市・都城をキーワードに、様々な学問分野の研究者が、古代日本の形成過程とその特質を解明してその成果を総合し、また女性人材の育成を図るべく、活発な研究教育活動を展開した。その結果、中間評価において評価されたように、**中核的な学術研究推進と人材育成においてはその目標を達成できた**と考えている。

本拠点では、個別分散の状況に陥りかねない諸学問分野間の壁を克服して、総合的に古代日本の解明にあたるべく、諸分野の代表からなる世話人会を組織し、また特任教授の配置等を含めて、近隣の関連諸機関との連携を強化しつつ拠点を運営するとともに、多分野の研究者が研究課題を共有化するための総合研究会を開くなどした。また、まもなく完全公開する**GIS(地理情報システム)を用いた「奈良盆地歴史地理データベース」**は、地図データの上に、古墳・小字名、文献史料・文学資料・発掘成果などのデータを重ねたもので、諸学問分野の研究成果を統合したものであるとともに、今後の諸分野の研究進展に寄与できるものである。

また本拠点は、本事業の開始前までは相互連携が必ずしも十分ではなかった近隣の、奈良文化財研究所・正倉院事務所・奈良国立博物館・橿原考古学研究所・

万葉古代学研究所や自治体などの研究機関との間に、古代都城制や古代日本語をめぐって、共同研究者・研究協力者、研究会・シンポジウム・講座の共催などの多様な形で、緊密な協力関係を築き研究の推進を図った。また奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所からは、拠点形成以前からの教育連携の上に、本拠点メンバーとして研究者を迎えた。

さらに東アジア～ユーラシアをも視野に入れ、中国・韓国・ベトナムという共通した都城文化を有する東アジア諸国の国家的文化財研究機関とも連携をとって、当該諸国の古代都城・集落遺跡の現地調査を実施するとともに、古代都城を巡る国際シンポジウムを開催した。また、**ベトナム・ハノイのタンロン城遺跡の調査・保存事業に、本拠点は継続的に協力を**行った。

このような活動を通じて、本拠点は**古代日本に関わる国内外を通じた研究教育連携拠点として立ち上がり**、今後もその役割を果たし続けていく基盤ができた。

具体的研究活動としては、古代都市・都城について多岐にわたるテーマを、国際的視野の中で取り上げて研究を深めた。その結果、都城史の中での天武朝の画期性、都城史と日本語表記発展史の密接な関係、中国都城モデル論の問題点などを明らかにし、都城制研究のレベルを上げることができた。また文化史的な側面では、正倉院文書や木簡に現れた日本語表記の特徴を、中国・韓国での漢文表記と比較しつつ検討し、また歌を記した木簡が近年相次いで見つかったことに着目し、それらの木簡に見える歌の表記と『万葉集』との異同等を検討、日本語表記の成立史に新たな視点を加えた。さらには奈良が古代日本の中心になった理由、現代的な視点からは後世から見た古代の位置づけ、遺跡の復原整備のあり方、歴史環境を生かしたまちづくりなど、古代を幅広い視野から検討もした。

本拠点は5年間に、国際シンポ5回、国際講演会4回、若手支援プログラム4回、例会8回、シンポジウム22回、研究会51回、公開講座20回、講読会20回、夏季講座3回、関連研究会・シンポ等15回など、きわめて活発に研究活動を展開した。これらの研究活動の成果として、シンポジウム・研究会等の成果は19冊の報告集にまとめ、またテーマに即した論文は10冊の報告集で公表した（うち5冊は出版社からの刊行で、2冊は近刊）。この他、重要な研究成果であるとともに、今後の研究の基盤ともなる、史・資料を集成して考察を加えたものを6冊刊行した。別に日本史分野を中心とした学術雑誌7冊もある。さらに都城制に関わる成果を国際的に発信するため、英文論文集を刊行する。

拠点は**人材育成のために**次のような方策を採った。

①COE研究員の採用（学位取得者・取得予定者を年4名採用）、②若手研究者支援経費の設置（博士後期課程院生・修了者を対象に、20万円以内の研究費を毎年5名以内に支給）、③RAの採用（毎年12名以内）④若手研究者支援プログラムの実施（全国の国文学分野の若手研究者を対象にしたサマースクールを毎年1度、4年間実施）、⑤連続講読会「漢訳仏典十講」の2年間開催、⑥若手研究者の自主的研究交流組織であるCOEサロンへの、経費などの積極的支援、⑦大学院の授業改革（複数分野の拠点形成者が担当する授業を新規開講し、院生教育を充実）、⑧国際シンポへの財政的支援。支援は、院生らが通訳として国際連携を実地に体験したり、海外の研究成果を直接吸収したりするなど、人材育成面での重要な役割を重視したためである。

こうした取り組みの結果、大学院博士後期課程学生やポスドク等の若手研究者の間で、専門分野・専攻の枠を越えた共同研究を盛り上げようとする機運が高まった。自由な研究交流の場としての**COEサロンの結成**もその1つの現れであり、それがまた研究発表や論文執筆への積極性を加速するといった効果を生んだ。そして学位取得者は増加し、大学や研究機関などへの就職者も増え、本拠点は当初目指していた**高度な専門能力を持つ女性人材の育成に実績**をあげることができた。

そして、このような古代日本に関する研究教育事業の展開の中で、古代の文化、環境、文字文化などに関する自然科学的な研究の必要性が認識されるに至り、理系教員の協力下に平成20年度初頭より、出土遺物や文化財に含まれる生体物質のタンパク質分析を行うことで、例えば仏像や墨の製法、古代の生物環境、生活環境などに関しての知見を得て、古代日本の歴史・文化・環境研究に新展開を図る計画がもちあがった。この計画は平成21年度より「**古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業**」（概算要求・3カ年事業）として採択された。これは本事業と密接な連関の下でスタートしており、大学としてもこれを強力に推進している。

概算要求の採択に従って形成した事業実施体制と連動して、本拠点形成事業の継承組織としての「**古代学学術研究センター**」の大幅な部門拡充改組も行い、そこで古代学研究の新展開を図ることで、**本拠点形成事業の格段の発展を目指す**。これを契機に近隣の関係諸研究機関との連携をいっそう深める。さらにこうした教育研究環境の中で、文理双方に強い女性人材の育成をめざしており、その計画はすでにスタートしているところである。





## 6. 拠点形成の目的

埋蔵文化財の発掘や古代史研究の進展などによって、古代日本の国家・社会像は急速に変化しつつあるが、未だ共通した古代日本像を結ぶには至っていない。特に本学が位置する奈良盆地は、前方後円墳の築造、古代都市の誕生、都城の設置など、古代日本形成の拠点であった。そこは政治・経済・外交・文化の中心であるとともに、『万葉集』や『日本書紀』をはじめとする多くの文学作品・歴史書を生み出した地であり、さらには春日大社・東大寺などの社寺も多く、精神的・宗教的センターでもあった。こうした奈良の地にあるという立地の強みを活かし、本拠点は古代都市・都城に研究の照準を合わせて、考古学・歴史学・地理学・国語学・国文学・建築史学・修景学・美術史学・生活文化史学など、およそ古代日本に関わる諸分野の研究者が共同し、それら諸学問分野の成果を統合して、**古代日本の形成過程とその特質を総合的に解明**することを目指す。

また、本学では将来構想として東アジアを中心としたシルクロード地域との学術研究交流及び国際貢献という目標を掲げている。本拠点はその一環として、東アジア史～ユーラシア史を中心とした世界史的視野の中で上記の課題に取り組み、アジアを始めとする国外の研究機関・研究者との研究教育交流を通じて、古代日本あるいは古代都市に関する**国際的研究教育の連携拠点**となることも目指す。

本拠点の特色は、上記のように複数にわたる関係学問分野を統合して、ややもすれば個別分散的状况に陥りかねない研究の壁を克服し、古代日本の形成過程とその特質を全体的に解明しようとするところにある。また、本学の立地する奈良には、奈良文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所・奈良県立橿原考古学研究所・奈良県立万葉文化館といった、古代日本に関わる文化財を研究調査対象とする第一線の研究機関が集中しており、さらに県下の市町村でもさまざまな分野で文化財の調査研究が行われている。しかし各機関の間で相互連携が十分に行われているとは言い難い状況にある。そこで本拠点は上記諸機関と密接な協力関係を築き、**国内外の研究機関・研究者との研究教育交流**を盛んに行う。

こうした諸学問分野にまたがる総合的研究と国内外を含めた学外機関・研究者との連携により、研究の個別分散的状况を乗り越え、世界史的な視座の中で研究を比較史的・総合的に進め、古代日本研究の中核となることを目指す。

またそこで得られた研究成果は、報告書の刊行に加え、GISを用いたデータベース等の形で電子メディア化し、インターネット上で情報発信する。とりわけ歴史学・考古学・地理学などの諸分野の成果を総合して作成する**GIS(地理情報システム)を用いたデータベース**は、諸学問分野統合の重要な基盤となるとともに、そこからまた新たな研究成果が生まれる。

以上に掲げた研究事業の推進を通じて、古代日本形成の全体像を画期的に構築し、その研究水準を飛躍的に向上させる。また近代史学の立場から、古代という時間の枠組みを客体化して古代史認識の確立過程を検証することで、時間的・空間的に日本古代そのものを相対化し、その特質を解明することもできる。

こうした研究を国内・国外の研究機関・研究者との研究交流・共同研究を通して推進することと、研究成果の積極的な情報発信により、本拠点を中心とする国内・国外を通じたネットワークが構築され、それは**古代日本に関わる研究教育連携拠点**として立ち上がる。

そこではまた、**人材育成**に努力する。すなわち大学院生や若手研究者が本拠点を中心とする全国的・国際的な研究活動に積極的に参加すること、データベース構築作業などを通じての研究蓄積や諸資料の享受、あるいは研究成果の教育への還元などによって、総合的・学際的・重層的に古代に関わる知識・技術・研究法などを身につけた院生・若手研究者が育つ環境ができあがる。さらにCOE研究員や若手研究者支援経費の支給などにより、その研究を支援する。

本拠点はさらには、GISなどを利用した研究成果の電子メディア化による情報の社会への発信、関係自治体と連携した博物館・資料館との展示・研究の協力、市民向け講座の開催、地域文化・文化財の掘り起こし、観光事業への協力などを通して、**社会連携・貢献の拠点**ともなることが期待される。

## 7. 研究実施計画

「**古代都市**」をキーワードに、諸学問分野ごとの研究活動を他分野とも連携して推進するとともに、それらの活動成果を統合して、**古代日本の形成過程とその特質を総合的に解明**していく。具体的には、次のような研究活動を実施していく。

・飛鳥以後に古代都市・都城が成立するに至る前史を究明する。そのため奈良県下の埋蔵文化財調査研究機関・研究者との間で協力体制を作り、研究会「**奈良盆地の開発史**」を組織する。そして弥生・古墳時代の奈良盆地の遺跡を検討し、拠点集落の発展過程を探るとともに、それに関連して墳墓、土地の利用・開発の様相をも明確にすることにより、古代宮都成立に至る過程に迫る。また、ヤマト王権の確立に大きな役割を果たした渡来人・渡来系氏族の実態を、関係遺跡を取り上げて考古学的に解明する。

・平城京を中心とした**古代都城**について、成立史や条坊制、景観・文化など、その全体的解明を目指す。そのため都城遺跡の発掘調査を担っている、奈良県や大阪市などにある、**多くの第一線の文化財関係機関・研究者との連携を重視**しつつ、**歴史学・考古学・地理学などを総合**して次のような研究を行う。①中国・韓国・ベトナムなど東アジア諸国の都市・都城との比較研究を、中央アジアやユーラシアなどの都市にも目を配りつつ深める。②平城京条坊制の実態解明を進める。特にケースワークとして右京地域の遺構検討と「左京十条」部（下三橋遺跡）の性格検討に取り組む。③古代都市の建築・園池などの景観と環境の復元を行う。④文献史料から見た古代都城の様相を検討するため『平城京史料集成』を作成する。⑤古代都市の変遷・終焉の様相を明らかにする。

・古代都市における生活や信仰の実態を解明する。そのために、古代衣食住の復元を、東アジア諸国も視野に入れつつ行う。また仏教信仰や神祇祭祀、道教の影響の検討などを通じて古代信仰の復元を行う。

・『万葉集』や木簡・正倉院文書などの日本古代の諸史料の検討を通して、古代における**日本語表記とコミュニケーションの実態究明**をめざす。その際、敦煌文書や漢訳仏典などの中国史料も視野に入れる。主に次のような研究を進

める。①『万葉集』『古事記』や正倉院文書・木簡史料などに見える、日本語表記・表現の検討を深める。正倉院文書については正倉院事務所、木簡は奈良文化財研究所の研究者と連携して、その釈文・内容を調査・研究する。②正倉院文書を用いて上代日本語の復元的研究を行い、その成果を『正倉院文書の訓読と注釈』という形で公表する。③『万葉集』『古事記』などを素材に、古代日本文学発想の研究を行う。④万葉古代学研究所と連携して大学の枠を越えた若手研究者を対象に行う若手支援プログラムや、主に院生を対象にした漢訳仏典の講読など、人材育成をめざす事業を行う。

・古代がそれ以後の時代においてどのように記憶されたのか、古代史学がどのように成立してきたのかなどの諸点を検証することによって、古代の歴史的な位置付けを明確にし、新たな古代学の構築をめざす。また、大和が古代日本の中心・中枢であったことの意味と、それが後代に与えた影響を検討する。さらに、中枢そのものの意味と形成過程について、学際的に検討する。・現代における古代観の問題として、「古代景観論」の構築を図るとともに、遺跡の活用法を追究する。

・考古資料・文献史料・服飾などの諸分野を横断する「古代文化データベース」を作成する。

・GISを利用し、地図情報の上に発掘の成果やさまざまな情報を重ねた「**奈良盆地歴史地理データベース**」を構築する。これにより、当該地域における歴史的景観の復元を軸とした学術的研究実施のための効率的な情報提供、さらに地域関係機関との連携に基づく種々の情報共有を実現しうる、統合的プラットフォームの確立ないしは情報拠点づくりをめざす。こうしたデータベース作成は、諸学問分野の成果統合の基盤となる。

・以上のような研究・作業の実行にあたっては、**国内外の関係諸機関・大学や研究者と有機的連携**を築く。また**当拠点を構成する諸学問分野間の連携**を図り、その成果の統合を実現する。また研究成果は、シンポジウムや研究会、報告書の刊行やデータベースのweb発信、さらに市民講座などを通じて、広く社会に発信する。

## 8. 教育実施計画

本学は、国内外の様々な分野で貢献できる**高度な専門能力を持つ女性人材の育成**を基本理念に掲げ、女性のための最高教育機関として研究教育を行ってきた。さらに本プログラムを通じて、研究教育内容を高度化させ、本学が果たしてきた役割を一層発展させることができる。具体的には以下の諸点にまとめられる。

**第1に、古代日本や古代都市に関して、国際的な視野での理解と高度な専門能力を持つ女性人材を育成**する。

本学では、大学院と外部研究機関との連携により、奈良の特色を活かしつつ研究教育を発展させる研究コアの1つとして、本拠点形成以前から「古代学学術研究センター準備室」を作り、多分野の教員が共同する活動に全学的な支援を行い、拠点形成後の平成17年度には「同センター」を正式に発足させた。また奈良文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所からの客員教員も本拠点に参加してもらい、さらに万葉古代学研究所などとも連携して研究を推進する。こうした諸分野・諸研究機関の研究者が協力・連携して、本プログラム事業を推進することにより、学生・若手研究者は一つの専門学問的視点だけから古代日本や古代都市の意義を理解するのではなく、総合的・学際的・重層的に知識や研究方法を学ぶことができる。また、奈良には多くの文化財があるので、文化財の扱いに習熟させ、その保存活用への意識を高揚させることもできる。

また諸資料・情報の整理のみならず、調査・研究に院生以上の若手研究者を参加させるとともに、研究の進展の過程で行われる専門の垣根を越えた討議の場に学生を参加させることで、研究能力を向上させる。

さらには、国際シンポジウムに参加し、また長期滞在して共同研究を行う外国人研究者との交流などにより、学生・若手研究者は当該テーマに関する高度な専門知識・能力を身につけるとともに、国際的視野の中で問題意識を獲得したり、歴史的意義を理解したりすることができる。このような研究教育環境は、まさに克服すべき個別分散的研究から脱却する最善の道であり、自己の研究課題や方法を鍛え発展させる教育効果が期待できる。そのため国際シンポ

には大学が運営費交付金からその経費を支援する。

**第2に、データベース・GIS作成により研究教育効果が向上**する。

データベース・GISが研究の発展や教育効果の深化に役立つ。さらにその作成のための基礎資料を得るためには、大量の先行業績や発掘調査資料などを読み込む必要があり、学生・若手研究者はこの作業を通じて、多様な分野の研究蓄積に触れ、身につけることができるようになる。この作業は、論文作成を始めとする学生・若手研究者の研究推進に大いに役立つ。

**第3に、古代史をはじめとする関連諸分野の教育を充実**させる。

本プログラムに参加する教員たちが、その研究成果を教育指導に還元することにより、その質や方法が大きく進展する。また、データベース等の多彩な教育アイテムを導入することにより、古代史をはじめとする関連諸分野の教育に革新的な効果をもたらすことができる。

**第4に、日本人としてのアイデンティティの確立と国際的力量的発揮に寄与**する。

本プログラムの眼目である古代日本に対する多元的理解を体得し、また古代史像創造過程への認識を深化させた学生は、アジアにありつつ国際化・グローバル化した現代日本において、そのアイデンティティを確立させ、幅広い分野で、偏狭にならず国際的な視野をもって、日本を見つめ、国際的にその力量・能力を十二分に発揮する人材となる。

**第5に、研究成果が社会へ還元**される。

プログラム完成後はもちろん、事業遂行途中においても、得られた研究成果やデータなどは、報告書の刊行、公開講座や公開シンポジウム、データベースの公開等を通じて、学界のみならず広く社会へ還元される。

なお、本拠点は女性人材への研究支援を積極的に行い、一流の研究者として育成・支援するために、COE研究員制度、若手研究者支援経費制度、RA制度などを設ける。また院生向けの講読会の実施、若手研究者の自主的研究の支援を行う。それとともに特に国文学分野を中心に、大学の枠を越えて全国的な若手研究者を対象に、若手支援プログラムを毎年実施する。



## 9. 研究教育拠点形成活動実績

### ①目的の達成状況

#### 1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

古代都市・都城をキーワードに、関係諸学問分野を統合して古代日本形成の経緯とその特徴を総合的に解明する研究教育連携拠点になることを標榜した本拠点は、以下のようにその**目的を概ね達成することができた**。

・国際シンポ5回、国際講演会4回、若手支援プログラム4回、例会8回、シンポジウム22回、研究会51回、公開講座20回、講読会20回、夏季講座3回、関連研究会・シンポ等15回など、きわめて活発に研究活動を展開した。そしてシンポ・研究会等の成果は19冊、テーマに即した論文は10冊の報告集(うち5冊は出版社から)で公表し、さらに6冊の資料集を作成した。他に日本史分野を中心とする学術雑誌7冊もある。

主な具体的成果は以下のとおりである。

・古代都城制分野では、中国・韓国・ベトナムなどの国家的研究機関や、奈良文化財研究所・橿原考古学研究所をはじめ、**多くの国内外の研究機関・研究者と連携**して、都市の成立、都城の立地・形態・機能・宗教、京城設定、複都制など多岐にわたるテーマで、古代都市・都城を多角的・総合的に、国際的視野の中で検討した。

その結果、都城史の中での天武朝の画期性、京城のもつ規定性、都城史と日本語表記発展史の平行な関係、中国都城モデル論の問題点などが明らかになり、**都城制研究を一段引き上げた**。また研究の基礎となる『平城京史料集成』を2冊刊行した。後述の「奈良盆地歴史地理データベース」と合わせて、都城の成立・実態・転変を研究する貴重な足がかりとなった。

・古代都城形成前史分野でも、橿原考古学研究所や県下自治体の研究者らと協力して「奈良盆地の開発史」研究を重ね、古墳時代までは都市が未成立であることを明らかにした。また『奈良盆地の古墳時代集落〈資料集成〉』を刊行し、「奈良盆地歴史地理データベース」と合わせて、古代都市が展開する前段階の奈良盆地の状況を総体的に把握することが可能になった。

・言語・文学分野では、正倉院文書や木簡などを素材に、中国・韓国と比較しつつ、日本語表記の特徴を探り、また難波宮跡などで出土した

**歌木簡**をいち早く取り上げて、その用字法や木簡に歌を書く意味などについての議論を深めた。また正倉院文書に初めて訓読文と注釈を付した、『**正倉院文書の訓読と注釈**』を3冊刊行した。これは、すべて漢字で記された正倉院文書を、漢文ではなく日本語を書き記した資料として読み直したものである。**正倉院文書を上代日本語の復原のために本格的に利用**したのは本拠点が初めてであり、**上代国語学研究に新たな糸口**を開いた画期的なものである。

・古代日本の中心がなぜ奈良にきたか、人はいかに社会を形成するかなどの、根源的で刺激的な課題を多く立て問題提起を行うとともに、後世における古代観、遺跡の復原整備、歴史環境を生かしたまちづくり等についても議論した。

・諸分野の成果に基づくデータを集積し、**GISを用いた「奈良盆地歴史地理データベース」**を作成した。これにより古代以来の小字地名、都城遺跡の発掘成果、古代～中世の土地利用実態を示す条里・条坊関連史料、都城前代の集落・古墳、万葉歌碑などの多様な地理情報を、電子地図上に重層的に復原し、古代から近代に到るさまざまな時間断面と空間情報を集積して、相互に関連づけ時空間的に奈良盆地の歴史を俯瞰することが可能となった。近く完全公開する。

こうして**古代日本の形成・特質が総合的、重層的に明らか**になり、最先端の研究成果を生み出すとともに、多くの国内外の研究機関・研究者との連携が築かれ、本拠点は**古代日本の研究教育連携拠点**となることができた。

#### 2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本拠点では、若手研究者・院生を育成するために、様式3-2で述べるような多くの取り組みを行った。その結果生まれたさまざまな成果の中で、特筆すべきは、大学院生やポスドク等の若手研究者の間で、専門分野・専攻の枠を越えた共同研究の気運が高まったことである。特に**COEサロン**は日常的研究会を積み重ねて、3度の連続研究会「古代都市を考える」を開き、学問分野を横断して古代都市を総体的に検討した。その企画や外部研究者の招聘などは、全て若手研究者が自主的に行い、その成果も論文集『古代都市とその思想』(COE報告集24)として結実し、成功した活動である。これは本拠点が学内外に門戸を開き、様々な学問分野の研

究者からの多角的研究成果を積み重ねてきたことが、若手研究者達に大きな刺激を与えた結果である。歴史学や国文学などでは研究者個人で行う研究スタイルが多かったが、本事業により醸成された共同研究の気運は、本学の新たな伝統として今後も受け継がれてゆくであろう。

### 3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

これまで連携研究があまりなされてこなかった諸学問分野が集まり、国際的視野の中で古代日本の諸側面の解明を目指したことにより、新鮮な視角や発想が生まれ、多くの研究成果が蓄積された。若干の例を挙げる。

古代都市・都城制に関わっては、大極殿の創始、歴代遷宮制度の廃止、本格的な中国式都城（藤原京）の造営計画などの施策が次々に打ち出された天武天皇の時代に都城成立史上の画期があること、藤原京の京城設定は、天武の父である舒明の事績を顕彰するためのものであることなど、藤原京の歴史的意義を明らかにした。また日本都城のモデルは中国都城にあるという通説的見解（例えば藤原京平面プランへの『周礼』の影響、複都制の実施）に対し、具体的考察を積み重ねた上で、単純な影響論の危険性を指摘したことも意義深い。

一方言語・文学分野では、正倉院文書の表現に中国の口語表現が多く見られること、用字には漢語表現を志向しつつも、漢語とは異なる日常的表現を用いることが多く、そこから官人の言語生活を窺うことができることなどが明らかになった。そして律令国家の中央集権的支配の進展と、木簡に見える物品名表記の変化や、地名表記の統一などには密接な関連があること、文字文化は百済など朝鮮半島との共通性が強いことが明らかになったことなどは、歴史学と言語学との共同研究の成果である。

さらに社会形成システムの考察、古墳築造に込められた政治的・思想的機能の検証、古代都市遺構を現代のまちづくりへ還元するための提言、近代における古代観の現れとしての、制服デザインへの古代服飾の応用に関する研究など、本拠点が行った研究活動は実に幅広い。

これらの活動により、きわめて広い意味内容をもつものとして、「**古代学**」という学問分野が立ち上がった。その結果、本学に**古代学学術**

**研究センター**が発足し、拠点の活動を継承発展させることとなった。それは国内外を含めた諸研究機関・研究者との連携を引き継ぎ、さらにより実態としての「古代」を明らかにするための理系分野との共同研究も含めて、総合的な「古代学」をいっそう発展させていく。

### 4) 事業推進担当者相互の有機的連携

本拠点では、**多様な学問分野の研究者が相互連携**を築くことを重視した。そこで各分野の代表からなる世話人会を組織し、運営上の課題を話し合った。研究面では、研究課題を全体で共有化するために、各分野から古代都市をテーマに論じる総合研究会を開くなどの工夫をした。

多分野の研究者が加わって議論した結果、新たな視角・発想が生まれた。また「奈良盆地歴史地理データベース」には、地理学・考古学・歴史学・国文学など、多分野の研究成果を統合した。そして最終年度の国際シンポでは、拠点の日本史・東洋史・考古学・地理学の研究者が、それぞれの視点で古代都城を論じたのである。

今後は古代学学術研究センターが、この連携を引き継ぎ、さらに理系の研究者や学外諸機関とも連携して「古代学」研究を推進していく。

### 5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

さまざまな分野で、中国社会科学院考古研究所、韓国国立文化財研究所、韓国国立扶余博物館、ベトナム社会科学院考古学院などの国家的研究機関や、北京大学・梨花女子大学・水原大学・ローマ大学など多数の大学の研究者との連携を築き、現地調査や国際シンポなどを積み重ねた。その結果古代日本を、国際的視野の下で分析し、成果を海外へ発信することもできた。それは共通の都城文化や古代遺跡を有する諸国での研究にも、大いに寄与できるものである。

さらに特筆すべきは、**ベトナム・ハノイのタロン城遺跡の研究・保存活動への貢献**である。ベトナムの中国型都城遺跡の存在が知られたのはつい近年であるが、本拠点はその重要性に早くから着目し、2度にわたる研究者の招聘や、メンバーの派遣、研究会の開催などを通じて、相互の研究交流を推進した。ベトナム側は本格的調査の経験が浅いこともあり、調査の技術面や情報・知識の蓄積面で多くの課題を抱えていたが、本拠点との交流の中で、日本の発掘方法を学び、遺構図作成や遺構の解釈力を飛躍的に



高めた。特に日本建築史を専門とする拠点メンバーが継続的に本事業に関わり、宮殿配置をほぼ解明し、国際ワークショップで公表した。

国内でも、奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所・橿原考古学研究所・万葉古代学研究所・元興寺文化財研究所など第一線の研究機関との連携を構築した。古代都城関係の英文論文集の作成には、それを高く評価した南カリフォルニア大学の研究者の協力を得た。

こうした活動の結果、**本拠点が古代日本研究の重要な連携拠点であることが、国際的にも認知**されてきている。この研究連携活動は、今後も古代学学術研究センターが引き継ぐ。

#### 6) 国内外に向けた情報発信

研究活動の状況及びその成果は、以下のよう  
にさまざまなルートで発信した。

①拠点の**ウェブサイト**や**ニュースレター「奈良と古代」**。②研究成果は**29冊もの『奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集』**で公開。うち6冊の史料・資料集は、今後の学界に寄与するところ大である。それ以外に1冊の学術紀要、『日本史の方法』7冊、出版社から刊行の5冊の論文集（2冊は21年度刊行）などがある。

③**国外への情報発信**については、中間評価でその不足が指摘されたのを受けて、ウェブサイトでの英文発信、報告集での原文・英文収録（国際シンポ）、英文要約収録（論文集）などを行った。また古代都城制の研究成果を国際的に公開するため、主な研究論文6編を収める**英文論文集**である“Ancient Capitals in Japan”を作成した。翻訳作業はアメリカ人研究者の協力を得て事業期間内に行い、21年度内に刊行する。

④データベースを用いた研究基盤情報の公開と利用促進に道を開いた。中核となる**「奈良盆地歴史地理データベース」**の意義については上記1)で述べた。データベース自体の構築は事業期間内にほぼ完了し、21年度から本格的に学外からの利用を可能にする体制が整った。また、大学当局の全面的バックアップにより、事業期間終了後もその構築と運用を継続する。

⑤成果を市民に発信するため、19・20年度に**連続市民講座や公開講座**を計20回開催した。いずれも多くの市民の参加があり、好評を得た。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

研究の継続に必要な**史・資料類を多く購入**した。その1つに正倉院に所蔵された文書・経巻等の写真版・デジタル画像集がある。本拠点では国語学・歴史学が協力して、正倉院文書から見た古代の言語や社会の復原に取り組んだ。本資料はそれに不可欠であり、研究を円滑に進めることができた。これらの資料を完備している研究機関は少なく、学外の研究者をも集めて、本拠点を基盤とする新たな共同研究（科研費）が立ち上がったことも評価できよう。

また、**GIS「奈良盆地歴史地理データベース」**の構築に補助金の多くを使用した。データベースの作成と運用に必要な電子機器類が整備され、拠点の情報発信基盤が整った。またデータ収集・入力に多くの人的労力を要し、大学院生・学部生を多数雇用した。その過程でデータの収集分析方法やGISソフトウェアの操作などに多くの学生が習熟し、学術情報を作成し発信する拠点としての人材育成に大きく貢献した。

#### ②今後の展望

本拠点の活動と成果は、**古代学学術研究センター**に引き継がれる。そこは、研究教育連携拠点という性格を継承し、さらに文理双方の共同研究である**「古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業」と連携**をとる。その中で学外の研究機関（奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所・橿原考古学研究所・元興寺文化財研究所など）との連携をいっそう深める。

#### ③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

諸学問分野を総合して研究を進めてきた拠点のこれまでの活動を通じて、学内ではメンバー外の理系教員との共同研究の気運が生まれた。そのことを受け、本拠点の活動を引き継ぐ古代学学術研究センターには、理系教員も加わり、②で述べたように**「古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業」と連携を進める**。

また海外では、**ベトナム考古学院とは拠点の築いた協力関係を今後も継続**することで合意し、南カリフォルニア大学の研究者との間には、本学を含め複数の日米の大学等が連携して、日本歴史考古学についての共同研究と、その成果をまとめたテキストの作成を、大学院生を含めた共同作業で進めようとの計画も進んでいる。

## 21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

|   |                    |      |     |
|---|--------------------|------|-----|
| 機 関 名   | 奈良女子大学             | 拠点番号 | K20 |
| 拠点のプログラム名称  | 古代日本形成の特質解明の研究教育拠点 |      |     |
| <p>1. 研究活動実績</p> <p>①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕</li> <li>・本拠点形成計画の成果で、DP（ディスカッション・ペーパー）、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの</li> </ul> <p>※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻（号）、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入<br/> 波下線（~~~~~）：拠点からコピーが提出されている論文<br/> 下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p> </div> <p>石崎研二「2種の点分布間における空間的適合に関する一考察」(『理論地理学ノート』15、1-12頁、2006)</p> <p>石崎研二「明治前期の奈良盆地における中心地の階層構造—GIS・数理モデルによる立地分析」(奈良女子大学21世紀COEプログラム・古代学学術研究センター編【以下、“COE・古代学編”と略】『古代学』1、69-75頁、2009)</p> <p>出田和久「畿内の四至に関する試考—その地理的意味に関連して」(奈良女子大学21世紀COEプログラム編【以下、“COE編”と略】『古代日本と東アジア世界』、249-263頁、2005)</p> <p>出田和久「京北班田図に関する若干の歴史地理学的検討—京北条里地域の景観をめぐって」(佐藤信編『西大寺古絵図の世界』、東京大学出版会、243-265頁、2005)</p> <p>出田和久「古代荘園図にみる景観と開発」(長谷川孝治編『地図の思想』、朝倉書店、60-63頁、2005)</p> <p>出田和久「近畿地方における前方後円墳の分布論的検討—「奈良盆地歴史地理データベース」の利用による墳丘規模と副葬品の時期別分布を中心に」(COE・古代学編『古代学』1、35-44頁、2009)</p> <p>今井範子、中山徹、野村理恵、室崎生子、咏梅、姪苺「定住生活における移動住居ゲルの利用実態と用途変化—中国・内モンゴル自治区シリンドル盟の牧畜民を事例として」(『日本建築学会計画系論文集』73、1735-1742頁、2008)</p> <p>岩崎雅美「戯画にみる奈良朝服飾—服種と着装の視点から」(COE編『古代文化とその諸相』、41-60頁、2007)</p> <p>岩崎雅美「7・8世紀の僧服とその周辺—東大寺の僧服を中心に」(COE・古代学編『古代学』1、18-27頁、2009)</p> <p>岩崎雅美「古代女性の袴と裳」(館野和己・岩崎雅美編『古代服飾の諸相』、東方出版、83-122頁、2009)</p> <p>岩崎雅美「簡袖と大袖考」(『古代服飾の諸相』、257-285頁、2009)</p> <p>岩崎雅美「近代制服にみる奈良朝デザイン—東京美術学校の制服誕生とその波及」(『古代服飾の諸相』、307-331頁、2009)</p> <p>上野邦一「274体の廃仏の発掘と埋め方をめぐって」(『文化遺産』18、10-13頁、2004)</p> <p>上野邦一「ハノイの宮殿遺跡の実態」(COE編『東アジアにおける古代都市と宮殿』、178-181頁、2005)</p> <p>上野邦一「ハノイの歴代宮殿跡の考察」(『東アジアの古代文化』123、124-133頁、2005)</p> <p>上野邦一「遺跡に残る痕跡が語る」(石澤良昭編『アンコール・ワットを読む』連合出版、53-75頁、2005)</p> <p>確井照子「中国歴史GISと日本古代史研究—時空間GIS作成の技術的課題」(COE・古代学編『古代学』1、76-85頁、2009)</p> <p>奥村悦三「古代日本語の文体と表現の形成」(COE編『古代日本の言語文化』、150-154頁、2006)</p> <p>奥村悦三「正倉院文書の文字とことば」(COE編『正倉院文書にみる古代日本語』、76-90頁、2007)</p> <p>加須屋誠「南都炎上とその再建—美術史学の観点から」(COE編『南都炎上とその再建をめぐって』、1-28頁、2005)</p> <p>加須屋誠、泉武夫、山本聡美『国宝 六道絵』(中央公論美術出版、全376頁、2007)</p> <p>金子裕之「平城宮の法王宮をめぐる憶測」(COE編『古代日本と東アジア世界』、5-23頁、2005)</p> <p>金子裕之「長岡宮会昌門の楼閣遺構とその意義」(COE編『古代都市とその形制』、49-71頁、2007)</p> <p>金子裕之「キトラ古墳壁画の玄武像をめぐる二、三の問題」(COE編『古代文化とその諸相』、11-40頁、2007)</p> <p>金子裕之「飛鳥・藤原京と平城京—七・八世紀の都と舒明王朝」(COE編『都城制研究(1)』、19-33頁、2007)</p> <p>金子裕之「なぜ都城に神社がないのか—都城とその周辺」(COE編『古代日本の支配と文化』、155-165頁、2008)</p> <p>小路田泰直「『古事記』『日本書紀』の語る日本国家形成史—火と鉄の視点から」(『日本史の方法』2、145-168頁、2005)</p> <p>小路田泰直「人・社会・神の誕生についての仮説—依存理論の確立に向けて」(『日本史の方法』6、19-34頁、2007)</p> <p>小路田泰直「ヒトから人へ—依存系としての人の誕生」(国際高等研究所編『ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義』、77-90頁、2008)</p> <p>小路田泰直「古代とは何か—プラトンからの手紙」(館野和己・小路田泰直編『古代日本の構造と原理』、3-22頁、2008)</p> <p>小路田泰直「箸墓の意味—崇神天皇紀の読み解き方」(小路田泰直編『死の機能 前方後円墳とは何か』、133-150頁、2009)</p> <p>坂本信幸「『言問はぬ木すらあぢさゝみ』再考」(『同志社国文学』第61号、28-43頁、2004)</p> <p>坂本信幸「紫のほへる妹」(万葉七曜会編『論集上代文学』第27冊、1-26頁、2005)</p> |                    |      |     |

- 坂本信幸『万葉集』の成立について』(COE編『古代日本の言語文化』、3-15頁、2006)
- 坂本信幸「柿本人麻呂の表現をめぐって」(『萬葉』195、1-34頁、2006)
- 坂本信幸「紫香楽宮出土歌木簡の意義と問題点」(COE編『紫香楽宮出土の歌木簡について』、2-9頁、2008)
- 佐原康夫「中国辺境領域における国家形成—「百越」を中心に」(COE編『古代日本と東アジア世界』、101-116頁、2005)
- 佐原康夫「周礼と洛陽」(COE編『古代都市とその形制』、31-47頁、2007)
- 杉本一樹「絵図と文書」(平川南ほか編『文字と古代日本 2 文字による交流』、吉川弘文館、28-69頁、2005)
- 杉本一樹『正倉院—歴史と宝物』(中央公論新社、全246頁、2008)
- 相馬秀廣「シルクロードのオアシス都市—過去・現在・未来」(『地理』51-11、33-39頁、2006)
- 相馬秀廣、高田将志、渡邊三津子「CORONA衛星写真・衛星画像を利用した地形調査—中国タリム盆地・トルファン盆地の活断層を中心として」(『地形』27-2、171-185頁、2006)
- 相馬秀廣、田然、魏堅、森谷一樹、井黒忍、伊藤敏雄、小方登「高解像度衛星画像の歴史学、考古学への貢献—中国乾燥地域における事例を通して」(COE・古代学編『古代学』1、45-54頁、2009)
- 竹内亮「藤原宮大極殿をめぐる諸問題」(COE編『都城制研究(2)』、37-46頁、2009)
- 竹内亮「智識寺小考」(COE編『古代都市とその思想』、34-46頁、2009)
- 竹内亮「五十戸と知識寺院—鳥坂寺跡出土篋書瓦の分析から」(『古代文化』60-4、120-134頁、2009)
- 館野和己「平城京の形態と機能」(COE編『東アジアにおける古代都市と宮殿』、5-31頁、2005)
- 館野和己「古代都城の成立とその意義」(COE編『都城制研究(1)』、1-18頁、2007)
- 館野和己「平城宮の大極殿」(COE編『都城制研究(2)』、47-58頁、2009)
- 館野和己「下三橋遺跡をめぐる論点の提示」(COE編『都城制研究(3)』、1-5頁、2009)
- 館野和己「日本への文字文化の伝来」(COE編『若手研究者支援プログラム(四)』、114-126頁、2009)
- 千本英史「京と地域・辺境」(小峯和明編『今昔物語集を読む』、吉川弘文館、169-186頁、2008)
- 千本英史「画像DBの現状と説話文学研究」(『説話文学研究』43、107-111頁、2008)
- 千本英史「なぜ「都市」が問題なのか—文学研究の立場から」(COE編『古代都市とその思想』、158-167頁、2009)
- 西村さとみ『平安京の空間と文学』(吉川弘文館、全195頁、2005)
- 西村さとみ「出大和」と「和風」の創造」(『日本史の方法』5、64-71頁、2007)
- 西村さとみ「条坊のうちそと—平城から平安へ」(館野和己・小路田泰直編『古代日本の構造と原理』青木書店、297-326頁、2008)
- 西村さとみ「記憶と場所—みやこという空間をめぐって」(COE編『古代都市とその思想』、168-180頁、2009)
- 西村さとみ「平城から南都へ」(COE編『古代都市の空間構造と思想—その現代的展開を目指して』、102-106頁、2009)
- 西山厚『日本の美術 No.502 僧侶の書』(至文堂、全98頁、2008)
- 西山厚『仏教発見!』(講談社、全238頁、2004)
- 野村鮎子「長安の記憶—周縁によるみやこの文学イメージ」(COE編『古代都市とその形制』、88-103頁、2007)
- 野村鮎子『歸有光文學の位相』(汲古書院、全470頁、2009)
- 広瀬和雄「古墳時代の「王統譜」に関する一考察」(小路田泰直・広瀬和雄編『王統譜』、青木書店、40-52頁、2005)
- 広瀬和雄「6・7世紀の東国政治動向(予察)—上総・下総・下野・武蔵地域の横穴式石室を素材として」(COE編『古代日本の支配と文化』、5-45頁、2008)
- 広瀬和雄「古代観の転換に向けての一考察—弥生時代に「自給自足」社会は存在したか」(『日本史の方法』7、52-77頁、2008)
- 広瀬和雄「古墳時代の国家フロンティア」(COE・古代学編『古代学』1、1-17頁、2009)
- 増井正哉 Preservation and Utilization of Multilayered Historical Heritages and Sustainable Urban Development, Case of Nara, Ancient Capital of Japan. (The International Symposium on Historic City and World Heritage “Conservation and Management of the Gyeongju Historic Area inscribed on the World Heritage List”, pp.53-63, 2008)
- 松尾良樹「日本の写本と中国の鈔本—『冥報記』をめぐって」(COE編『古代日本語を読む—東アジアの文字環境』、61-79頁、2005)
- 松尾良樹「古代日本語の中の中国語」(COE編『古代日本の言語文化』、106-149頁、2006)
- 松尾良樹「日本霊異記の文字と訓詁」(COE編『若手研究者支援プログラム(二)』、2-19頁、2007)
- 宮城俊作「歴史的都市遺構の現代的再生」(『建築雑誌』123-11、46-49頁、2008)
- 宮城俊作「歴史的風致をめぐるリテラシーの継承とプロセスの表現」(『ランドスケープ研究』7-2、158-161頁、2008)
- 宮城俊作「平城宮の歴史的遺構と環境を基盤とした現代的土地利用の構想」(COE編『古代都市の空間構造と思想—その現代的展開を目指して』、118-122頁、2009)
- 宮路淳子「東アジアにおける初期都市論の現状と課題」(COE編『古代東アジアにおける都市の成立』、1-18頁、2009)
- 山辺規子「都市ローマの城壁」(COE編『古代都市とその形制』、120-136頁、2007)
- 渡辺晃宏「平城宮中枢部の構造—その変遷と史的位相」(義江彰夫編『古代中世の政治と権力』、吉川弘文館、122-149頁、2006)
- 渡辺晃宏「平城宮大極殿の成立と展開」(COE編『都城制研究(2)』、59-71頁、2009)



## ②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

- 2004年11月16日(火) 於:本学 国際研究会「ハノイ・タンロン城の発掘調査の概要ーベトナム古代都市研究Ⅰ」  
参加者13名(うち外国人2名) 主な招待講演者 Bui Minh Tri(ベトナム社会科学院考古学院)
- 2004年12月2日(木) 於:本学 国際研究会「ハノイで発見された古代宮殿跡の発掘調査ーベトナム古代都市研究Ⅱ」  
参加者12名(うち外国人4名) 主な招待講演者 Ha Van Phung(ベトナム社会科学院考古学院)、Le Thi Lien(同)、Pham Van Trieu(同)
- 2005年3月19日(土) 於:本学 国際シンポジウム「東アジアにおける古代都市・宮殿ーその形態と機能ー」  
参加者102名(うち外国人7名) 主な招待講演者 何歳利(中国社会科学院考古研究所)、金教年(韓国国立古宮博物館)、Tong Trung Tin(ベトナム社会科学院考古学院)
- 2005年3月20日(日) 於:本学 国際講演会「東アジアの古代都市」  
参加者120名(うち外国人7名) 主な招待講演者 何歳利(中国社会科学院考古研究所)、金教年(韓国国立古宮博物館)、Tong Trung Tin(ベトナム社会科学院考古学院)
- 2005年8月20日(土)・21日(日) 於:本学 国際シンポジウム「古代日本の言語文化」  
参加者451名(うち外国人各5名) 主な招待講演者 David Lurie(アメリカ コロンビア大学)、権五晔(韓国 忠南大学校)、Chavalin Svetanant(タイ チュラーロンコーン大学)
- 2005年10月5日(水) 於:本学 国際講演会「南京建康城をめぐる」  
参加者33名(うち外国人4名) 主な招待講演者 張学鋒(中国 南京大学)
- 2005年10月6日(木) 於:本学 国際研究会「中国と日本の古代都城」  
参加者15名(うち外国人2名) 主な招待講演者 齊東方(中国 北京大学)
- 2005年10月8日(土) 於:本学 国際講演会「中国・日本の古代都城を考える」  
参加者38名(うち外国人3名) 主な招待講演者 齊東方(中国 北京大学)
- 2006年11月11日(土)・12日(日) 於:奈良文化財研究所(11日)、本学(12日) 国際シンポジウム「古代都市の空間構造と思想ーその現代的展開を目指して」  
参加者98名(うち外国人8名) 主な招待講演者 Paola Falini(イタリア ローマ大学)、譚青枝(中国 陝西省考古研究所)、金眞成(韓国 東新大学校)
- 2006年11月25日(土) 於:本学 国際シンポジウム「古代・服飾文化の交流ー日本と韓国を例に」  
参加者30名(うち外国人3名) 主な招待講演者 曹圭和(韓国 梨花女子大学校)、権瑛淑(韓国 釜山大学校)
- 2008年2月16日(土)・17日(日) 於:本学 国際シンポジウム「古代東アジアにおける都市の成立」  
参加者110名(うち外国人8名) 主な招待講演者 朴天秀(韓国 慶北大学校)、申鍾國(韓国国立文化財研究所)、Tong Trung Tin(ベトナム社会科学院考古学院)
- 2008年2月18日(月) 於:本学 国際研究会「ハノイの古代宮殿」  
参加者19名(うち外国人1名) 主な招待講演者 Tong Trung Tin(ベトナム社会科学院考古学院)
- 2008年8月10日(日) 於:奈良県立万葉文化館 若手研究者支援プログラムシンポジウム「韓国木簡の現在」  
参加者90名(うち外国人10名) 主な招待講演者 李鎔賢(韓国 国立扶余博物館)
- 2009年2月28日(土)・3月1日(日) 於:本学 国際シンポジウム「都城制研究集会 第3回 東アジアの複都制」  
参加者159名(うち外国人9名) 主な招待講演者 劉振東(中国社会科学院考古研究所)、梁正錫(韓国 水原大学校)

## 2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

大学の全面的支援の下、人材育成のための教育取組等としては、以下のようなことを行った。

**1) COE研究員の採用**：学位取得者ないし取得予定者を対象に、拠点に関わる研究・事業を行う若手を年4名ずつ採用。募集は学外と学内から2名ずつの公募とし、研究実績と研究計画を提出させ、人選は世話人会で決定した。計9名が任期1年（ただし再任あり）で雇用され、拠点の行う事業（研究会の運営や報告書の編集など）を担いつつ、研究報告や論文執筆などを進めた。また6)で後述する若手の自主的研究交流組織であるCOEサロンでは、その結成と運営に主導的な役割をはたした。

**2) 若手研究者支援経費の設置**：拠点メンバーが指導する博士後期課程院生ないし修了者を対象に公募し、20万円以内の研究費を毎年5名以内、計22名に支給した。研究計画を提出させて公募し、人選は世話人会で決定した。この経費によって若手研究者の研究資料購入や研究出張などに対して多くの助成を行うことができ、大学院生の学位取得やポストドク研究者の成果発表などに大きく寄与した。

**3) RAの採用**：拠点メンバーの推薦により、博士後期課程院生を毎年12名以内採用し、資料収集・研究補助・データベース作成などを担当。それらの作業により、多様で大量の資料や研究蓄積などに直接触れ、またデータの収集分析方法やGISソフトウェアの操作などにも習熟し、大きな教育的効果を得ることができた。同様の効果は、同類の作業に従事したRA以外の院生・学生にも及んだ。

**4) 若手研究者支援プログラムの実施**：研究機関の枠を越えた研究交流が不足している国語・国文学分野の状況を改善するため、全国の若手研究者を対象とするサマースクールを毎年（平成17～20年度）、万葉古代学研究所をはじめとする他機関との連携によって実施した。内容は国語・国文学だけでなく中国語学・文学や歴史学にも及び、形式も講義、参加者の討論会、シンポジウム、現地踏査など多彩である。具体的に取り上げたテーマは、「古代日本の言語文化」（17年度）「古代日本の散文をめぐる」（18年度）「戦後万葉学の歩み」（19年度）「関連分野の学び方」（20年度）である。参加者は本学にとどまらず、多くの大学の准教授以下の若手に及び、毎回数十人が参加し、研究機関・大学の枠を超えて、最先端の研究者から若手研究者が学ぶ場として定着した。さらに20年度は「韓国木簡の現在」と題して、日韓の歴史学研究者をも交えての国際シンポを行い、学問分野を越えた研究の場となった。

**5) 連続講読会「漢訳仏典十講」の開催**：若手研究者の古代漢字文献の読解力向上をめざし、漢訳仏典の講読会を、古代学学術研究センターと共同して平成16～18年度にかけ、2期(20回)行った。

**6) COEサロンへの支援**：COE研究員や大学院生など若手研究者が中心となり、自主的研究交流組織であるCOEサロンが結成され、研究員がその運営を主導した。そこは古代史・近世史・東洋史・考古学・文学など学問分野を異にする若手が、その枠を超えて議論を重ねる場となった。拠点は経費の支出や助言を通して積極的に支援し、学外研究者の招聘や、研究会の開催、報告集への成果還元などを行った。

**7) 学術振興会特別研究員の採用**：COE枠として認められている毎年1名の特別研究員を、事業推進担当教員が指導する博士後期課程院生を対象とした学内公募で総計4名採用。全員が博士論文を執筆し、学位を取得した。

**8) 授業改革**：拠点の研究成果を大学院博士後期課程の授業に還元するため、メンバーが担当する授業を平成18年度から新設し、21年度からは前期課程院生も受けられるようにした。拠点の特質を生かし古代への多様なアプローチを習得できるように、日本史・中国史・考古学・地理学・建築史・服飾史などを専門とする拠点形成者が、分担して授業を行った。またメンバーの授業で、COEの成果を還元する内容のものについては、シラバスに「COE関連授業」と明記した。

**9) 国際シンポジウムの開催**：大学院生らが通訳を勤めたり、海外の最先端の研究成果を吸収したりして、国際連携による研究を実地に学ぶことができ、国内外の諸分野で活躍できる高度な専門能力を持つ女性人材の育成をめざす教育面でも大きな効果があった。そのため開催経費は大学が措置した。

そのほか大学の自己負担により、全学共通の**助教1名**を学外公募により平成16年度に採用し、COE担当としたことも、若手研究者育成につながるものである。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、比較的小規模で、かつ女性研究者、教育者の養成を目指している大学において、地域に根差した統合的研究プロジェクトを、大学の全力をあげて完遂したことは何よりも高く評価できる。また、大学内部に留まらず、他の研究機関との共同研究においても極めて積極的であったと評価できる。

人材育成面においては、地理的特性を活かした、都城を中心とする奈良盆地の開発史に関わる女性・若手研究者の育成について、多くの女性研究者が本プログラムに積極的に参加したことは評価できるが、特に研究のリーダーとしての女性研究者の比重が大きく増大したようには見受けられず、大学の個性をより活かした研究者育成に努力することが望まれる。

研究活動面については、「奈良盆地歴史地理データベース」による地理学と考古学の統合、環境史研究など、世界的に意味を持つ数多い業績をあげ、また数多い国際ワークショップ、シンポジウムの開催は、国際的文化価値を持つ奈良の研究を国際的に発信する初発の段階としては、大きな意味を持ったと評価できる。しかしながら、各業績は依然として個別研究の集積に留まり、共同研究の成果は比較的少なく、統合的研究、共同研究の組織化に向けての継続的努力が望まれる。また、外国人研究者に本研究プログラムの目指す統合的盆地開発史の方法と理論を伝達することについても、十分とは言い難く、更なる努力が望まれる。

補助事業終了後の持続的な展開については、恒久的な拠点形成の契機とした継承発展への努力は高く評価でき、継承機関「古代学学術研究センター」の発展が大きく期待される。大学の本プログラムを一過性のものとせず、指摘した課題の解決への努力が引き継がれることが強く期待される。